

開催地名	徳島県上板町
開催日時	令和5年12月17日(日) 10:00～11:30
開催場所	上板町役場
語り部	菊池 由貴子 (岩手県大槌町)
参加者	上板町自主防災組織連絡協議会、上板町防災士会、地域住民、関係機関 88名
開催経緯	<p>当町では、南海トラフ巨大地震及び中央構造線・活断層地震による被害が想定されており、防災訓練や防災フェスタ等により災害への啓発活動に取り組んでいる。</p> <p>しかし、町職員を始め、町民の多くは実際に大きな災害を経験しておらず、災害に対しての知識や緊張感、また、身近にある問題としての当事者意識が少ない。</p> <p>今回語り部を招き、震災についての体験談や教訓、情報の重要性についてお話しいただくことで災害に対しての知識やイメージを掴みたい。</p>
内容	<p>(1) 被災した時の状況</p> <p>地震発生時、住んでいた大槌町ではなく隣町の釜石市に用事で出掛けていた。震度6弱の揺れは立っていられず、しゃがんでやり過ごした。そんな揺れが3分続き、地面が割れるかと思った。津波が来ない内陸部だったので、いったんはそこに留まろうとしたが、「自分の町に戻らねば」と思ってしまった。道路は車が数珠つなぎで、歩道には人がたくさんいた。道路を歩いているおじいさんが「6mの津波がくるぞ」と教えてくれたがピンと来ない。そのまま運転していたところ、道路の先に津波が流れ込んできたのが見えた。津波の際はとにかく高台へ逃げなさいという母の言葉を思い出し、車を乗り捨て、高台の神社(32.3m)へ避難した。私は車を乗り捨てて助かったが、「車に乗ったまま亡くなった人がたくさん見つかったんだよ」と後から聞いた。行方不明者も多く、遺体が見つかるだけまだいい、という会話も少なくなかった。</p> <p>町最大の避難所には1000名以上が避難した。ペットを連れて逃げてきたため、中に入らなかった人もいた。低体温症になる方もいたと思う。避難所では掃除当番、炊き出しなどの役割分担が決まっていた。大槌高校の生徒たちが精いっぱい目の前のことを手探りでやろうとしていた。この行動は大人にも大きな影響を及ぼした。</p> <p>震災後は停電が続き、携帯電話やインターネットなどが使えない。情報は紙に書いて張り出すしかなかった。行方が分からない方の顔写真が張り出されていたことは今思い出しても涙が出そうになる。</p>

(2) 被災を経験して学んだ教訓

・津波がきたら平地を逃げても意味がない。とにかく高い場所に逃げる。津波は30cmでも流されて亡くなることがある。津波の後に火事が多発した。河川津波といって津波が川を2～3km逆流してやってくる被害もある。

・市町村長の判断と行動に住民の命がかかっている。(大槌町では避難指示が出なかった。町長も含め40名の職員が亡くなった。)自治体には住民の命を守る責務がある。

・自治体では、めったに災害は起こらないからと、有能な人材は他の部署に行きがちであるが、防災業務こそ有能な人材を配置すべきである。

・住民はしっかりした首長や議員を選ぶ。

・避難訓練には地域振興券の配布などの特典を付けてでも参加させるべきである。

(3) 情報発信の重要性

災害時に知りたいことは自分の町の情報である。デマや噂が広がり、正確な情報がない中で、新聞のありがたみを感じた。だが、「なぜよその人に自分の町の情報を教えてもらわなければいけないのか」と思うようになった。自動販売機やATMができたことを皆に知らせてあげたい、などという動機から2012年6月に大槌新聞を創刊した。町の情報インフラを平時から整えておくことが必要である。それが平時、災害時問わず役立つ。



開催地より

震災時の具体的な経験談をお話いただいたことで、実際に大きな災害が起きればどのような行動をとるべきなのかを考え、災害を身近な問題として捉えることができた。

自治体の役割や情報発信の重要性を再確認し、今後の啓発活動等に繋げていきたい。